

藤

日吉佐阿弥作

前

ワキ 都の僧

シテ 里女

後

ワキ 前に同じ

シテ 藤の精

地は 越中

季は 三月

「山又山を遙々と。く。越路の旅に出でうよ。

「是は都方より出でたる僧にて候。我此程は加賀の国に候ひて。こゝかしこの名所を一見仕りて候。又是より善光寺へ参らばやと思ひ候。

「雪消ゆる。白山風ものどかにて。く。日影長江の里も過ぎ。さゝぬ礪波の関越えて。青葉に見ゆる紅葉川。そなたとばかり白雲の。比美の江行けば名に聞きし。多胡の浦にも着きにけり。く。

「是は早越中の国多胡の浦とかやに着きて候。此所は藤の名所と承り及びたるに。誠にあれなる藤の今を盛と見えて候。立ち寄り見候ふべし。実におもしろく咲きて候。おのが浪に同じ末葉のしをれけり。藤咲く多胡の恨めしの身ぞ。

「古言の思ひ出でられて候。

「なふくあれなる旅人に申すべき事の候。

「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

シテ「是は多胡の浦とて藤の名所なり古き歌に。多胡の浦や汀の藤の咲きしより。波の花さへ色に出でつゝ。

詞「かやうの歌をも詠じ給はで。おのが波に同じ末葉のしをれけりなど口ずさび給ふは。あら心なの旅人やな。

ワキ「思ひよらずや人ありとも。知らで吟ぜし古歌ながら。

シテ「花のためには如何ならん。

ワキ「同じ末葉のしをれぬる。

シテ「恨みならずや恨めしや。彼縄麻呂の歌に。

地「多胡の浦。底さへにほふ藤波を。く。かざして行かん。見ぬ人のためとよみたりし。此花を心なく。詠じ給ふは恨めしや。実にや思へば咲く花の。色をも香をも知る人ぞ。知るとよみしも理りや。く。

ロンギ地

「不思議やさてもかくばかり。其白露の古言を。語り給ふは誰やらん。

シテ

「我を誰とか夕日影。紫にほふ花鬘。心にかけてたび給へ。

地

「心にかけて思へとは。梢にかゝる藤波の。

シテ

「多胡の浦わに。

地

「名にしおふ花の精なりと。夕雲の足はやみ。多胡の浦風うちなびき。花の波立つもとに。寄るかと

見えて失せにけり。く。(中人)

ワキ歌

「かすむ夜の。月は出で、もうば玉の。く。よるべ定めぬ浮れ鳥。鳴く音も法の声添へて。花の跡訪ふ春の風。声物すぎき波枕。仮寐の夢やさますらん。く。

後シテ

「如何なれば。むなしき空に散る花の。あだなる色に迷ひそめけん。

ワキ

「不思議やな夜も更け過ぐる月影に。あらはれ出づ

る姿を見れば。有りつる女人の顔せなり。いかさま疑ふ所もなく。花の精にてましますか。

シテ「恥かしながら花の精。妙なる御法の一味の雨に。

開くる花の笑みの眉。是まで顕はれ出でたるなり。

ワキ「あら有難やさりながら。斯しも言葉をかはす事。

何の故にてあるやらん。

シテ「異性化身自在不滅の。縁に引かれて夜もすがら。

歌舞をなさんと参りたり。

ワキ「実にや元より狂言綺語も。

シテ「讃仏乗の因縁。

ワキ「隔てはあらじ。

シテ「紫の。

地「ゆかりの色も縁ならめ。ゆかりの色も縁ならめと。

教への外なる法までも。今こそ悟りの。開くる心の花なれや。されば非情の草も木も。成仏こゝに荒磯海。深きは法の道ぞかし。く。

地クリ

「実にや春を送るに。舟車を動かす事を用ひず。唯  
残鶯と落花とに別る。

シテサシ

「紫藤の露のもとに残る花の色。

地

「実におもしろや水の面に。月のかすめる春もはや。  
紫にほふ花かづら。斯かる致景は又世にも。

シテ

「奈呉の浦わも程近く。

地

「詠めにつゞく景色かな。

クセ

「なつかしき。色のゆかりと思ふにも。心にかゝる

藤波の。夜昼わかでいたづらに。送り迎ふる年月  
の。春の花散りて青葉に。夏橘のにほふにぞ。見  
ぬ世の人も忍ばるれ。桐の葉落ちて秋来ぬと。し  
るくも月の影すむや。浦吹く風に小夜ふけて。暁  
と白波。立ちさわぐ村千鳥。友よぶ声や霜雪に。  
冬のけしきの知らるらん。

シテ

「かやうに移ろふ四つの時。

地

「理りなれや夏かけて。さかり久しき藤波の。花に

立ち添ふ朝霞。暮れゆく春のかたみぞと。惜しむ  
心も紫の。深く頼みを松が枝に。かゝる契りぞ頼  
もしき。

シテ 「おもしろや。 (舞)

ワカ 「おもしろや。ゆたに吹くなる春風に。

地 「誘はれつゝも千代を唱ふる。千代を唱ふる。く。

シテ 「松にかゝりて咲く藤の。

地 「薄紫の雲の羽袖を。かへす舞姫。

シテ 「歌へや歌へ折る柳落つる梅。

地 「あるひは花の。

シテ 「藤生野も。

地 「隔てぬ色も。匂ひも深海松の。英遠の浜風多胡の  
浦わに。吹きよすも音さゆる。波も綾どる舞の袂。  
月にひるがへす。影もうつるや紫の。く。曙に  
かをりて。たなびく霞に入りにつけり。

